

## 68 キリストの臨在時に実際に目にする事柄とは

ものみの塔聖書冊子協会は、1874年臨在説以来、度重なる失敗の末、一度捨て去った1914年説を何年も後に再び拾い上げて、復活させ、間違っただのは年代計算ではなく、その年に期待した内容の捉え方の方だったとして、再度採用することになりました。

まるで、賞味期限が切れて返品された「餅」を、もったいないからと、賞味期限を引き延ばしたラベルを貼り替えて再出荷したどこかの会社の手口を思い出させますが、それはともかくとして、このたびは、それまでの理解を捨てて、「キリストは見えない様で天で臨在を開始された」というものでした。それまでは、聖書に記されている通り、地上に見える姿で臨在される事になっていました。



**「そして以上示す如く一八七四年以後此の地上に  
主イエスは臨在されてゐるのである」  
— 神の立琴」日本語版409節」**

とにかく、「見えなければこっちのもの」で、何でも好きなことが言えるようになるわけです。

というわけで、キリストの臨在は見えなかつただけで、すでに100年近くも昔の1914年にすでに起きた事になっております。

ですから、「ものみの塔協会」はこの「臨在は見えない」ということを何としてでも固守しなければ、一切の教理が崩れ去り、協会も崩壊を余儀なくされるのですから、「キリストの臨在は人の目に見える」ということは、あつてはならないのですが、しかし、聖書そのものにはっきりと「人々は見る」と書かれているために、次のような記事が出ることがあります。

\*\*\* 啓4章20ページ7節 イエスは励ましの言葉を携えて来られる \*\*\*

「イエスのご自分の弟子たちと共に過ごした最後の晩に、「あとしばらくすれば、世はもはやわたしを見ないでしょう」と、弟子たちにお告げになりました。(ヨハネ14:19)では、「すべての目は彼を見るであろう」と言われているのはどうしてでしょうか。イエスの敵が肉眼でイエスを見るようになると思えるべきではありません。なぜなら、イエスの昇天後、使徒パウロが、イエスは今や「近づき難い光の中に住み」、「人はだれも見たことがなく、また見ることのできない」方であると述べているからです。(テモテ第一6:16)ヨハネは明らかに、「認める」という意味で「見る」と言ったのです。それは、わたしたちが創造物を通して、目に見えない、神の特質を見る、つまり認めることができるのと同様です。(ローマ1:20)太陽が雲の後ろに入れば見えなくなるように、イエスも肉眼では見えないという意味で、『雲と共に来られる』のです。」

まず、この引用文から検証してみることにしましょう。

この記事で指摘している「すべての目は彼を見る」と記されているのは次の聖句です。

「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る、ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。」(啓示 1:7)

この句の後に記されてる「然り」は、(ギリ語:ナイ) はい、本当に、確かに、その通りなどの意。「アーメン」は、真実という意味です。

この同じ意味の語が後ろに二つも付けられていて、このことの真実性を2重3重に強調しているにも関わらず、いきなり「イエスの敵が肉眼でイエスを見るようになることを考えるべきではありません。」と、思考を停止させ、「そう書いてあるけど、そう考えるな!」とは、まるで聖書のこのページを破り捨てて踏みつけんとばかりに、真っ向から一刀両断に切り捨てています。よほどこの聖句に敵意を抱いているのかもしれませんが。

聖句そのものと、その記述を導かれた著者に対して僅かばかりの敬意を持っているなら、疑問を投げかけるとしても、「果たして本当に、イエスの敵がイエスを肉眼で見るようになることを示そうとされているのでしょうか。」くらいの表現をするのではないのでしょうか。

まして、敢えて「然り、アーメン」と保証されていることばならなおのこと、慎重に考慮すべきではないのでしょうか。

さて、「見えない」という理由として、「イエスの昇天後、パウロが書いた」というテモテ第一 6:16 を引用しています。まず、これによって、この聖句そのものが昇天後のイエスについての記述であるかのように印象付けようとしています。本当に、この聖句は「イエスが見えない」ということを裏付ける聖句なのではないのでしょうか。その聖句を引用してみますが、この句は、神のことを述べているのかイエスのことを述べているか微妙な部分がありますので、新世界訳と共に幾つかの翻訳から引用して比較してみたいと思います。

#### 新共同訳 1987

6:13 万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなさったキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。

6:14 わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで、おちどなく、非難されないように、この掟を守りなさい。

6:15 神は、定められた時にキリストを現してくださいませ。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、

6:16 唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることでできない方です。この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。

#### 前田訳 1978

6:13 わたしは万物を生かしたもう神と、ポンテオ・ピラトのとき、よい証をなされたキリスト・イエスの前で命じます。

6:14 われらの主イエス・キリストの出現まで、汚れなく、とがなく、おきてをお守りなさい。

6:15 彼の出現は、さいわいにいます唯一の君、もろもろの王の王、もろもろの主の主がみ心にかなう時に成就なさるでしょう。

6:16 彼だけが不死を保ち、近づきえぬ光に住み、だれも見たことがなく、見る事ができない方です。彼に永遠の誉れと力がありますように。アーメン。

#### 新改訳 1970

6:13 私は、すべてのものにいのちを与える神と、ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされたキリスト・イエスとの御前で、あなたに命じます。

6:14 私たちの主イエス・キリストの現われの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。

6:15 その現われを、神はご自分の良しとする時に示してくださいます。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、

6:16 ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。アーメン。

#### 口語訳 1955

6:13 わたしはすべてのものを生かして下さる神のみまえと、またポンテオ・ピラトの面前でりっぱなあかしをなされたキリスト・イエスのみまえで、あなたに命じる。

6:14 わたしたちの主イエス・キリストの出現まで、その戒めを汚すことがなく、また、それを非難のないように守りなさい。

6:15 時がくれば、祝福に満ちた、ただひとりの力あるかた、もろもろの王の王、もろもろの主の主が、キリストを出現させて下さるであろう。

6:16 神はただひとり不死を保ち、近づきがたい光の中に住み、人間の中でだれも見た者がなく、見ることもできないかたである。ほまれと永遠の支配とが、神にあるように、アアメン。

まずパウロはこれらの言葉を極めて力強い口調と文体で記しています。

「すべてのものを生かしておられる神、また、証人としてポンテオ・ピラトの前でりっぱに公の宣言をされたキリスト・イエスのみ前であなたに命じます。」(テモテ第一 6:13)

そしてこれまた、祈りの最後のように「アーメン」で結んでいます。

14節で、「キリストの臨在 / 顕現まで掟を守るよう勧めます。

15節で それは「幸福な唯一の主権者」が定めの際に示される」

16節で 彼は「唯一人不滅で、光の中に住み、誰も見たことなく見る事ができない」

問題は、16節の誰も見たことなく見ることのできない」方がものみの塔記事の言うように「イエスを指しているのかどうかです。

まず15節では、「唯一の主権者、王の王 主の主」なる方が、「それ」を示されるという内容ですが、確かに「王の王、主の主」は啓示19章でイエスに対して用いられている称号です。

しかし15節は、その方が、定めの際に「それ」つまり「キリストの現れ」を示されるとしていますから、その「唯一の主権者」は神の他におられません。

では16節はどうでしょう。「神は・・・」と訳している翻訳もありますが原文は代名詞です。

しかし、この記述はその前後の文脈を見て行きますと、この彼が誰を指しているかは明らかです。

特に11節を見ますとパウロは「神の人よ」と呼びかけて、「クリスチャン」に対してと言うより、ダイレクトに神と人との関係に訴えています。

この部分の記述は、神の業、神の計画、神の特質などについて述べているものです。

「キリストの臨在」についても、その神の計画として語られています。

実際、臨在は、キリストが自らの意志でその時を決められるわけではありません。「その時は、子もみ使いも知らず」ただ父だけがご存じです。

「わたしの主に対するエホバのお告げはこうです。「わたしがあなたの敵をあなたの足台として置くまでは、わたしの右に座していよ」。2 あなたの力の杖を、エホバはシオンから送り出して、こう言われます。「あなたの敵のただ中で従えてゆけ」。(詩編 110:1 - 2)

それで、テモテ第I 6章のこの部分では、直接キリストについては何一つ触れてはいません。

ましてや、昇天後のキリストに関しての描写などではありません。「唯一、不死の方で、光の中に住む、これまで誰も見たことがなく、また見ることもできない、唯一の主権者」という描写は、父なる神を描写したものであることは明らかであり、それ故に、ギリシャ語から翻訳された全ての聖書は、これを「神」としています。

キリストは3日の間死んでいましたし、多くの人が見ました。

上の記事で、ものみの塔は、『使徒パウロが、イエスは今や…「人はだれも見たことがなく、また見ることのできない」方であると述べている』としてこの聖句を紹介していますが、どこをどう読んでも、使徒パウロは、「イエスの」「昇天後の」「今」の状態について述べてなどいません。誰でも自分の聖書を開いて読んで確認できるのに、この聖句を引き合いに出して、「キリストは絶対に見えない」という主張の根拠としているのは、「子供だまし」としか言いようがありません。

『太陽が雲の後ろに入れば見えなくなるように、イエスも肉眼では見えないという意味で、『雲と共に来られる』のです。』

イエスは「雲の後ろに隠れて来られる」とは書かれていません。これは、どうしてもイエスを見せたくない「ものみの塔」の妄想で、聖句は「すべての目は彼を見る」とはっきりと記しているのです。「すべての目」の中でエホバの証人の目だけは例外のようで、彼らだけには見えないのでしょうか。



そういうわけで、「全ての人」がキリストの臨在を、単に「知る」だけでなく「見る」と言うことですが、地球上に住む全ての人実際にどのように、キリストを見ることになるのかは、私にはわかりません。

書かれていない、不明なことを、勝手な想像であれこれ書くつもりはありません。

しかし、ものみの塔協会が、こうした論議を扱う記事では決まって頻繁に用いる（上の記事の中にも「イエスも肉眼では見えないという意味で・・・」とあるように）「肉眼で」という表現について少し触れておきたいと思います。

協会は、全体的に、物事をぼやかすために、「肉眼で見る」ということを不当に過小評価しているように見えるところが多々あります。

しかし、人の視覚は物事を認識判断するのに最も重要な手段です。

実際、神は見えませんが、その描写には、神の顔、手、足、瞳、鼻などがあり、その栄光は様々な宝石の光、色で表されます。こうした様々な描画的な表現は、人が肉眼で見た経験があるからこそ、効果的なものになっています。また預言者にご自分のお考えを伝えるために、多くの場合に「幻（ビジョン）」をお見せになります。

「肉眼」で見る、見せることの重要性を特に物語っているのは、キリストの復活です。

復活された後のイエスはすでに人間ではありませんでした。神やみ使いと同じ霊的な存在でした。

それを「特別な計らい」で「肉眼で見えるようにされました。

「イエスが…天に上げられた日まで…四十日にわたって彼らに現われ、…」(使徒 1:1 - 3)

「三日目によみがえらされたこと、さらに、ケファに現われ、次いで十二人に現われたことです。そののち彼は一度に五百人以上の兄弟に現われました。」(コリント第一 15:4 - 6)

その四十日間、イエスは「肉眼」で見える姿で、ご自身を表されました。

もし、肉眼で見える仕方で現れなかったなら、弟子たちは、イエスが復活されたことをどれくらい確信できたでしょうか。確かにクリスチャンたるもの「…わたしたちは信仰によって歩んでいるのであり、見えるところによって歩んでいるではありません。」(コリント第二 5:7) というのは確かですが、神は人間の長所と弱点をよくご存じであり、また「神のご意志はあらゆる人が救われて真理の正確な知識に至る」ことであり、そのために役立つことであれば、当然、[肉眼]で見て確認、確信できるように物事を整えられると考えてよい理由があります。

「見る」という、優れた性能と機能を持つ目を設計し人間に与えられた神は、他ならぬ、これまでの神のご計画の中で最大のものであり、極めて重要なキリストの臨在の時を確認する手だてとして、それを「目で見る」という方法を差し控えられるのでしょうか。

だからこそ、その約束の言葉の後に「然り、アーメン」という、あたかも、自筆のサインの上に判子まで押したかのような保証の言葉を付け足されているに違いありません。

ところで、「見よ、彼は雲と共に来る。そして、すべての目は彼を見るであろう。」と同様の言葉はこの啓示の書の中だけでも幾度となく繰り返されています。

「わたしは速やかに来る。」(啓示 3:11) 「見よ、わたしは速やかに来る。」(啓示 22:7) 『見よ、わたしは速やかに来る。』(啓示 22:12) 『しかし、わたしは速やかに来る』…(啓示 22:20) また、「私は再び来る」というこれと同様の言葉は、例え話を含め、聖書の多くのところで記されています。

それが、「見える、見えない」はともかく、ものみの塔の教理である、天にいたまま、王として臨在を開始したというのは「私は来る」という約束に適っていません。

イエスの約束はとにかく「もう一度来る!」というものです。どこにですか、「再び」ですから、他ならぬこの「地上に」以外にはあり得ません。

「天で王になりました。それは、再び来るという約束を果たしたことです。」誰が納得できるのでしょうか? 「行ったまま」ではないでしょうか。それが最初からの目的、意図されたことであれば、そのように約束されたはずです。それじゃ困りますと言う人間などひとりもいません。キリストの臨在、神が主権を摂って人間の世界に介入されたという証拠が、何一つ「見えない」のは、「臨在は見えない形で天で起きた」、「成就したけど肉眼では見えない」のでは無く、「成就してないから見えない」という事実を物語っているという結論が、理性を働かせる人にとっての結論です。

さて、「臨在は見えない」という主張と関連がある、もう一つの論点をここで取り上げておかなければなりません。

それは、臨在時にクリスチャンに起きるとされる、聖書の不思議な記録です。

#### 携挙について

まず、この「携挙という」表現、語句を使用するすることに関しての [ お断り ] とも言うべき説明ですが、これはテサロニケ第一 4:17 に基づく、クリスチャンにとっての関心の的になっている箇所の一つです。

「生き残っているわたしたち生きている者が、彼らと共に、雲のうちに取り去られて空中で主に会い、こうしてわたしたちは、常に主と共にいることになる」(テサロニケ第一 4:17 新世界訳)

この聖句は「復活」以上に不可思議な要素をもっているためか、余り頻繁に登場しない話題で、このことを端的に表現する語彙も限られているようです。

ちなみにワッチタワーライブラリで、この語を検索しても、何もヒットしません。つまり一般の書物からの引用も一切ないということです。ここで、この「携挙」という語について何を意味する語なのかをはっきりさせるために、一つの辞書の定義を載せておくことにします。

「携挙（けいきよ、英語 :Rapture）とは、プロテスタントにおけるキリスト教終末論で、未来の主イエス・キリストの再臨において起こると信じられていることである。まず神のすべての聖徒の霊が、復活の体を与えられ、霊と体が結び合わされ、最初のみがえりを経験し、主と会う。次に地上にあるすべての真のクリスチャンが空中で主と会い、不死の体を与えられ、体ののみがえりを経験する。

携挙は患難前携挙の文脈で語られることが多いが、患難前携挙説を採らない教派でも、携挙の語を使用することがある。」(wikipedia)

この辞書の定義の是非はともかくとして、パウロがテサロニケ人への手紙の中で「終わりの日」のキリスト臨在の際に、墓に眠る歴史上の是認されたクリスチャンが全て復活した（第一の復活）直後、その時に地上に生きている真のクリスチャンに起きることとして記している出来事です。このことを端的に示す語は、この「携挙」という語以外にはないようなので、私は、教団宗派に関わりなく、「携えられ挙げられる」という聖書中のこの出来事を示す語として便宜上この語を使用します。この後にこの語が出て来る時は、特定の教理や信仰の立場とは無関係に、単に聖書のこの記述を示す語句としてお読み下さい。

さて、この「携挙」の話しをなぜここで取り上げているかということ、協会の言う「臨在は見えない」という主張と密接に関係があるからです。

エホバの証人の方は、ほとんど、この聖句に関する知識はありません、出版物にまれにしか取り上げられないからです。たとえ引用されてもつぎに挙げる記事のように、引用はされてはいるもののこの聖句自体を解説することはありません、下の引用文はその典型的な例のひとつです。

\*\*\* 塔 86 10/1 14 ページ 18-19 節 平和の神からの慰め \*\*\*

「1914 年以降、み使いの頭としてのイエスは、「キリストと結ばれて」いる人たちを集合させる天的な命令を出しておられます。「死んで眠っている」そうした油そそがれた者たちの場合、このラッパのような召集令は、彼らが霊的な復活を遂げて天に行くことを求めます。「ものみの塔」誌は長い間、油そそがれたクリスチャンのこの死からの復活が 1918 年に始まったという見解を示してきました。

しかし、地上に残されている油そそがれたクリスチャンたち、今や 1 万人を下回るほどに人数が減少しているグループに関してはどうですか。それらの人たちも忠実のうちに地上の生涯を終えなければなりません。パウロは自分が彼らと共にキリストの臨在の時にいるかのように、こう書いています。「その後、生き残っているわたしたち生きている者が、彼らと共に、雲のうちに取り去られて空中で主に会い、こうしてわたしたちは、常に主と共にいることになるのです」。(テサロニケ第一 4:17。) そのようなわけで、やがて 14 万 4,000 人の全員が、子羊イエス・キリストと共に天のシオン山で祭司また王として仕えるため、のみがえらされることになります。『これが第一の復活です』。

「復活」について述べる中で、「しかし、地上に残されている油そそがれたクリスチャンたち、…グループに関してはどうですか。」と尋ね、「生きている者が、雲のうちに取り去られて空中で主に会い」という、この携挙に関する聖句を示し、「そのようなわけで、やがて…よみがえらされることとなります。『これが第一の復活です。』」と述べています。

分かり易いようにもう一度繰り返しますが、「その時、生きている人は、空中に取り上げられます」「そのようなわけで、よみがえることとなります、これが復活です。」という説明です。

この、人を煙幕でやさしく包み込むような説明の仕方をどう思われますか。

ここで改めて、テサロニケのその部分を引用して、この説明の仕方について考えてみたいと思います。

「主の臨在の時まで生き残るわたしたち生きている者は死んで眠っている者たちに決して先んじないということ、これが、エホバの言葉によってわたしたちがあなた方に伝えるところなのです。主ご自身が号令とみ使いの頭の声また神のラッパと共に天から下られると、キリストと結ばれて死んでいる者たちが最初によみがえるからです。その後、生き残っているわたしたち生きている者が、彼らと共に、雲のうちに取り去られて空中で主に会い、こうしてわたしたちは、常に主と共にいることになるのです… (テサロニケ第一 4:15 - 17)

パウロは「死んで眠っている者たち」という表現と「生き残るわたしたち」という2種類の人々について述べています。そして「死んで眠っている者たち」が「最初によみがえる」、「よみがえる」というのは死からの復活という意味です。「その後」「生き残っているわたしたち生きている者」が「雲のうちに取り去られて空中で主に会う。」という説明です。

もし、携挙が復活と同じあるとすると、幾つかの矛盾、不可解なことが生じて来ます。

まず「死んでいるもの」が「生きている者」より先に復活するというこの説明をあなたは必要としますか？ 言うまでもなくこれ以上当たり前のことはありません。「生きている者」が「死んでいる者」よりも先に復活することはありません。というか、そもそも「生きている者」は復活しません。

もし「その時生きている者」が死んでから復活するというのであれば、パウロのこの部分は全く余計で何の必要もありません。(復活が一時に全部ではなく、ある一定期間の間に起こるとして(聖書はそうした事は何も述べていません)) ひとたび「復活」が始まれば、後は、生きている人の寿命が尽きた時という順番になるのは当然のことで、殊更に「決して先んじないということ、これが、エホバの言葉によってわたしたちがあなた方に伝えるところなのです。」などということを取って述べる必要がどこにあるのでしょうか。それは、「午後1時は、絶対に午前中にはきません。これが神が定められたルールであると今あなたに伝えるのです。」と力節するのと同じです。何と無駄な訴えなのでしょう。

さらにまた、携挙する人々は、「彼らと共に、空中で主に会う」つまり先発隊である復活組と一緒にあって、キリストに会うということです。もし携挙が復活と同じことであるとすれば、臨在時に生きている人の最後の一人が死ぬまで、何年も何十年も、キリストと、「第一の復活」にあずかる人々(その中には12使徒やパウロなども含まれているのでしょうか)は、そのまま延々と待たされることになり、「空中」で、文字通り「宙ぶらりん」の状態で過ごすことになるのです。



この奇妙な教理を教えている、ものみの塔協会の、或いは奴隷級と呼ばれる「油そそがれた」人々の最後の一人の寿命が尽きるまで、キリストと歴史上の忠実なクリスチャンたちは、何もすることもないまま手持ちぶさたで、ただただ「待つ」ために「待たされる」こととなります。

(最近、組織の存続を諮るために、「世代」を「油注がれた残りの者」に変えた上で、その世代をひたすら引き延ばすために、「表象物にあずかることに遠慮することはない」「それを飲食する人を咎めだてするな」という助言によって、「油そそがれた者一増幅一大キャンペーン」を続行中のため、年々増えている中で(恐らく、そのうち、2万3万と増やして行くに違いありません)ともかく神の言葉聖書は「復活組」と「携挙組」が「空中で共に主に会う」と明確に述べている以上、臨在時に生きている天的クラスの真のクリスチャンの最後の一人が、挙げられてやって来るまで、その空中に居続けなければ、神の言葉を成就することにはなりません。

この状態は「キリスト臨在」のもう一つのさらに重要な目的である諸国民の裁きを開始するために、「空中」を過ぎて、この「地上に」達することになっているのですが、その直前に起きることになっている預言が成就しない限り、つまり、「エホバの証人の油そそがれた人の最後の一人に、ここに来て頂かない限り次の行動に出ようにも出られないので、ひたすらお待ちする以外に、今後の行動のための手も足も出ないのです」と言うような言葉を主イエス・キリストに言わせようとしているのが、他ならぬ、「復活と携挙を同じだと主張する「ものみの塔」の教理の意味する所なのです。

協会の教理によれば、すでに1914年に、神のGOサインによって、天から下って来られましたが、奴隷級は、今日(2011年夏)まで、100年近く、自分の主を「空中」に待たせ続け、さらにその上に、増え続けさせている「奴隷級」の故に、後2,30年か4,50年かは知りませんが、ともかく、自分の主人に向かって「私たちが死んでそこに行くまで百年だろうが、さらに何年かかろうが、それまで、そこで待ってる!」と、言わんばかりの「奴隷」とは一体何者なのでしょう。

つまり、「復活」と「携挙」は同じことだという教理は、これほど馬鹿げた教理だということです。言い換えれば、こうした馬鹿げた教理の上に、「奴隷級」や「ものみの塔協会」は成り立っているということです。

さて、ちょっと半裁が横道にそれた感はありますが、この教理に関する他の協会の説明の話しに移します。

こうした多くの矛盾を含んでいるにも関わらず一貫して、協会の出版物はこの聖句に関するどの記事もみな同じ説明を繰り返しています。

「その後、生き残っているわたしたち生きている者が、彼らと共に、雲のうちに取り去られて空中で主に会い、こうしてわたしたちは、常に主と共にいることになるのです」。(テサー 4:17) このように、「子羊の結婚の晩さん」に招かれていてなお残っている者たちは、地上での歩みを忠実に終えて死ぬ時、直ちに復活させられ、天において花嫁級の仲間の成員に加わります。一洞 - 2676 ページ 復活

「生きている者」とは、キリストの臨在の期間中に生きている人々のことです。彼らは「取り去られて」、主イエスに会います。忠実な初期クリスチャンの場合と同様、天でキリストと結ばれるには彼らも人間としては死ぬ必要があります。-「塔 93 1/15 6 ページ」

天に召されるクリスチャンは例外なく全員死んで復活するというのが正式教理です。このように、「ものみの塔」はこの「携挙」を「復活」と全く区別を付けないようにして、事実上この教えを無視しています。

さて、では、なぜこうなっているかという、すでに1914年に臨在は始まっており、それ以来墓の中のクリスチャンは天に復活しているという教理であるため、そして、その後も、何の見える変化もなく、それまでの長い歴史と同様、いわゆる、油注がれた残りの者と見なされた人も依然、死んでいるために、「空中で主に会う」ということが成就するためのタイミングを過去にも将来にも確保できない教理となってしまうためです。

本来なら、臨在時つまり1914年の復活の直後に、地上に生きている人は、天に挙げられているはずですが、当然、そうした事実がない以上、見えない復活は「すでに起きました」と言えますが、これに付いては、そういうごまかしがきかないので、これから成就するとも「過去の出来事」にすることもできないために、といて「携挙も見えない」とも、し得ない故に「人が死なずに挙げられる」などと言うことはなく、すべて「復活」のことだとする以外になかったのです。しかし、これもよく読めば、明らかに「復活」とは違う話だと言うことは誰にでもすぐ分かってしまうので、一番確実な解決策は「知らんぷり」を決め込むという方法です。これについては、ひたすら沈黙を守る以外にはないという状況にあります。

ここで、話しを元にもどして、最初に取り上げた「臨在は見えない」という見解と、今ここで考慮している「携挙」との関連を扱いたいと思います。

協会の出版物の「論じる」という書籍の中の「天に運び去ること」という項目の中でこのことがQ&A形式で示されています。

**キリストは目に見える仕方で雲に乗って現われ、次いで世の人々が見ているうちに忠実なクリスチャンを天に連れ去って行くのですか**

**イエスは世の人が肉眼でご自分を再び見るかどうかについて何か言われましたか**

ヨハネ 14:19, 口語 :「もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがた [ イエスの忠実な弟子たち ] はわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである」。(下線は追加。)(テモテ第一 6:16 と比較。)-論 340 ページ

ここでも、臨在は見えないという説明の理由と同じ論理が使われています。

このヨハネ 14:19 の前の部分に注目してください。

「そしてわたしは父にお願いし、父は別の助け手を与えて、それがあなた方のもとに永久にある

ようにしてくださいます。それは真理の霊であり、世はそれを受けることができません。それを見ず、また知らないからです。あなた方はそれを知っています。それはあなた方のもとにとどまり、あなた方のうちにあるからです。わたしはあなた方を取り残されたままにはしておきません。わたしはあなた方のもとに来るのです。」(ヨハネ 14:16 - 18)

「世」は「真理の霊を受けることができない、それを見ず、また知らないから」であると言われます。それは「世の人々は〔肉眼〕で「真理の霊」を見ることができないという意味でしょうか。もちろん見ることはできませんが、それは「世の人」に限らず、どんな人間にも見えません。しかし「あなた方はそれを知っています」と対比していますので、「世の人々」だけが見えないというのは当然〔肉眼〕で見るかどうかということなど、初めからまったく問題にしていなかったことが分かります。

イエスは、まもなく死んで、天に挙げられますから、確かに、世はもはやイエスを見なくなると述べられ、しかし、それに対比して、クリスチャンたちには「真理の霊」が彼らのもとに留まり、彼らの内にあり、それゆえに「取り残されたまま」にはしない。と約束されます。〔肉眼〕やスキンシップにイエスと関わることはできなくなりますが、死んでいなくなっても、決して弟子たちは、「取り残されたまま」にされず、霊において引き続き、深い絆で結ばれ、キリストの存在を認識、体感できるということでしょう。

ともかく、ヨハネ 14:19の「世はもはやイエスを見ない」という表現で言おうとしているのは、イエスを〔肉眼〕で見ることはできないということではなく、「世」は、今後キリストとの関わりを持たなくなる（しかし、クリスチャンはイエスとの関わりを継続する）ということであり、ともかく、この聖句は、「全ての目はキリストが雲と来るのを見る」と、繰り返し述べる聖句を否定する根拠になるわけではありません。

さて、ではもう一つ、携挙が復活と同一であるとする、「論じる 340ページ」を引用して、また別の点を考察してみましよう。

#### テサロニケ第一 4 章 17 節で述べられている、『雲に包まれて引き上げられる』人たちとはだれのことですか

「15 節によれば、それは「主の来臨の時まで残る」忠実な人たち、すなわちキリストの来臨の時になお生きている人たちのことであると説明されています。それらの人はいつか死にますか。ローマ 6 章 3 - 5 節やコリント第一 15 章 35, 36, 44 節によれば、それらの人は死ななければ天の命を得ることはできません。しかし、死んだ状態のままキリストの再来を待ち望まなければならないというわけではありません。そのような人は直ちに、「またたく間に」「引き上げられ」、天で、主と共にいるのです。」—論 340 ページ

ここで、根拠として採用している「ローマ 6:3-5」と「コリント I 15:34,35,44」を引用してみます。

6:3 それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。

6:4 わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。

6:5 もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。(ローマ 6:3-5)

15:35 しかし、死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。

15:36 愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。

15:44 つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。(コリント I 15:34,35,44)

これらはいずれも「復活」に』についての説明を示したもので、一言で言えば、「復活するためには死ななければならない」という記述です。

これでは、質問の内容と答えの出所が完全にずれています。

質問は「テサロニケ第一 4 章 17 節で述べられている、『雲に包まれて引き上げられる』人たちはだれのことですか」なのに「答え」は『復活するとは』どのようなものなのかというものであり、「雲に挙げられるのは誰のことか」という質問の何の答えにもなっていません。

例えて言うなら、こんな場面です。「皆さんここで何をしているですか」「ここにコンタクトを落としちゃったんで探してるんです。」「良いことを教えてあげます。こんな暗い所じゃなくて、あっちの明るいところで探さない」「捜し物をする時は私はいつもそうしていますよ」「ほら、向こうの方で何か光ってるがあるでしょ。あれがそうに決まっています」「何なら私が見つけてき



てあげましょうか」というと、この人は、自分の思考方法の不思議さに気付こうともせず、即座に戻って来て全くの「オカドチガイ」のものを、さも自慢げにあなたの手を持たせてくれるでしょう。

あなたはその人に感謝するどころか、愛想笑いさえする気にならないでしょう。



さて、こんな例えに出て来るような人に任せてはおけないので、気を取り直して自分で探しましょう。この質問の答えは、「あんな所」じゃなく、ちゃんとあるべき場所である「ここ」にありますコリント15：34ではなく、少し先の15：50－55辺りに記されています。これも幾つかの翻訳を引用してみます。

#### 新改訳 1970

15:50 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。

15:54 しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのみ込まれた。」とされる、みことばが実現します。

15:55 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

#### 新共同訳 1987

15:50 兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。

15:51 わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。

15:52 最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。

15:53 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。

15:54 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。」

15:55 死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」

#### 前田訳 1978

15:50 兄弟方、このことを申します。肉と血は神の国を継ぎえません。朽ちるものは朽ちぬものを継ぎません。

15:51 ここに奥義を告げます。われらは皆眠るのではありませんが、皆が変えられるでしょう。

15:52 たちまち、瞬く間に、最後のラッパです。ラッパは鳴るでしょう。そして死人は朽ちぬものによみがえり、われらは変えられましょう。

15:53 それは、この朽ちるものが朽ちぬものを着、この死ぬものが死なぬものを着ねばならぬからです。

15:54 そしてこの朽ちるものが朽ちぬものを着、この死ぬものが死なぬものを着るとき、聖書に書かれていることばが成就するでしょう。「死は勝利に呑まれた。

15:55 死よ、なんじの勝利はどこにある、死よ、なんじの刺はどこにある」と。

#### 新世界訳

15:50 また、兄弟たち、わたしはこのことを言います。肉と血は神の王国を受け継ぐことができず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはありません。

15:51 ご覧なさい、わたしはあなた方に神聖な奥義を告げます。わたしたちはみな〔死の〕眠りにつくではありませんが、わたしたちはみな変えられるのです。

15:52 一瞬に、またたくまに、最後のラッパの間にです。ラッパが鳴ると、死人は朽ちないものによみがえらされ、わたしたちは変えられるからです。

15:53 朽ちるものは不朽を着け、死すべきものは不滅性を着けねばならないのです。

15:54 しかし、〔朽ちるものが不朽を着け、また〕死すべきものが不滅性を着けたその時、「死は永久に呑み込まれる」と書かれていることばがそのとおりになります。

15:55 「死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか」。(コリント第一 15:50 - 55)

物質の血肉が、そのまま天に住まうことができないのは、現代の知識から、誰にでも分かるでしょう。注目したいのは51節です。「眠りにつく」というのは「死ぬ」という意味です。ですから、パウロが述べているのは、「わたしたち人間は例外なくは皆が死ぬわけではない」なぜなら「死ぬ」のではなく、臨在時に生きているクリスチャンは「変えられる」、つまり「死んでいる時間さえない、生きたまま瞬時に、瞬く間に、「変えられる」からだと言うことです。

パウロはここで2種類の人々について述べています、一つは「死者／朽ちる者」であり、もう一つは「わたしたち／死すべき者」です。

#### 52節

「死者」は朽ちないものによみがえる（復活）

「私たち」は変えられる（一瞬に）

#### 53節

「朽ちる者」は不朽を着ける（復活）

「死すべき者」は不滅性を着ける（一瞬に）（死すべき者であり死んではおらず、現に今生きている人）

54でも同様のことが繰り返され、55節で、この2種類の変化が起きることによって、「死は勝者」ではなくなると述べています。

そもそも「復活」はキリスト前からあり、その信仰、希望もユダヤ人にとって何も新しいものではありません。

パウロはこれらを「神聖な奥義、神秘を告げます」と断ってから告げています。「死なずに、生きたまま、一瞬にして不滅の存在になる」これは確かに真新しい情報であり、神秘です。

単に「復活」の希望について述べているのであれば、奥義でも神秘でも何でもありません。

これこそが、臨在時に、先ず「死んで眠っている人の」（第一の）復活があり、それに引き続いて起きるとされている、地上で生活している最中に突然「取り去られて空中で主に会う」と描写されている「携挙」として起きる事を説明したものです。

さて、こうして見てきますと、「キリストの臨在」の時には実際に何が起きるか、何を目にする事になるのかが見えて来ます。

すでに引用しましたが、詩編 110：1，2 に示されているように、キリストの臨在までは、神の計画に従って、神の右でずっと待つておられ、神が決められた日に、神のGOサインで、地に下られることになっています。そのことは、テサロニケ第1 4：16からも「神のラッパの号令」によって開始される事が分かります。これが「臨在の開始」であり、マタイ24章で述べられている出来事に匹敵します。

「それらの日の患難のすぐ後に、太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされるでしょう。またその時、人の子のしるしが天に現われます。そしてその時、地のすべての部族は嘆きのあまり身を打ちたたき、彼らは、人の子が力と大いなる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう。そして彼は、大きなラッパの音とともに自分の使いたちを遣わし、彼らは、四方の風から、天の一つの果てから他の果てにまで、その選ばれた者たちを集めるでしょう。」（マタイ 24:29 - 31）

「選ばれた者たちを集める」ことが、すなわち、第一の復活とそれに続く携挙のことです。

先にも触れましたが、キリストが完全に地に到着する前に、「キリストと結ばれて死んでいる者たちが最初によみがえるからです。その後、生き残っているわたしたち生きている者が、彼らと共に、雲のうちに取り去られて空中で主に会い、こうしてわたしたちは、常に主と共にいることになるのです」とあるように、「空中」に迎えに行く形で、集められます。」

「その時二人の男が野にいます。一方は連れて行かれ、他方は捨てられるのです。二人の女が手臼をひいているでしょう。一方は連れて行かれ、他方は捨てられるのです」（マタイ 24:40 - 41）

この出来事は、「その時生きているクリスチャン」に生じるので、普通に生活しているさ中に、「空中に引き挙げられる」ことによって生じます。

ですから、復活組と携挙組は順番の違いこそあれ、それは立て続けに行われることであり、キリストが「空中」からさらに「地上」に臨在された時点にはもう地上には唯の一人も真のクリスチャンはいないはずで、考えて見れば、歴史上のどのタイミングでも、人々は福音を知り、信仰を持つようになり、バプテスマを受けクリスチャンになる人は切れ目なくいつまでも、いつでも生きて存在しているのであり、「キリストが選ばれた者たちを集める」のを実行されるの

に、その人々が死ぬまで待っていることはないのです。「キリストの臨在」はその連綿と続いた歴史に終止符を打つことであり、従って臨在時に生きている人だけには特例を設ける必要があり、それが、生きている状態のまま不滅の体に変えられ挙げられるという、神の計画されている、また採用されている手段、手法であり、それが「携挙」ということです。

この記事は「キリストの臨在時に実際に目にする事柄とは」というのがテーマなので、実際この時おおよそどんなことを人々は目にするのだろうかと言うことを書いてみたいと思いますが、(幾分想像を含みます)

まず、「その時」が来ると、復活が始まりますが、これは当然見えないでしょうから、実際には気付かないかもしれません。(「死者」が不朽を身につけるのも「瞬く間」であるということですから、全員が復活するのに、さして時間はかからないでしょう。) その後引き続いて、携挙がなされますが、これは恐らく、外部の人々にも「肉眼」で見えるに違いありません。それはちょうど、西暦1世紀にキリストが昇天されたのと同様の光景かも知れません。携挙に与る人は、「臼を引いている女」のように、屋内のキッチンなどにいる人も瞬時に不朽の体に変えられるので、建物の中であろうと関係なく、挙げられるであろうと考えられます。しかし、全くの突然では、さすがに当人でも当惑や驚愕はあり得るので、「私を呼ぶ声」のような、何らかの合図が事前になされるのではないかと考えられます。

なぜ今こんなことをここに書いているのかと言いますと、この時こそ、つまり「キリストが臨在を開始された」一番最初に目にする状況は、戦争とか食糧が不足するとか、そんな不確かな不明瞭ことではなく、全ての人類が、超自然的な、前代未聞の、信じがたい、あり得ない、夢に違いない、驚異的な、目を疑う、出来事を目の当たりにすることから始まるということを示すためです。

実際に聖書の記述を読むなら、「キリストの臨在」つまり「世の終わり」となるのは、そのようなものであり、その直後に、直ちに裁きが、つまりある人々の滅びが始まるという、どの歴史にもなかった、誰にも想像だにできない恐るべきことが現実となる時だということなのです。

また同じタイミングの記述を「啓示の書」から示すとこの記述に当たります。

「彼が第六の封印を開いた時に見ると、大きな地震が起こった。そして、太陽は毛の粗布のように黒くなり、月は全体が血のようになった。そして、いちじくの木が激しい風に揺り動かされてその熟していない実を投げ落とす時のように、天の星が地に落ちた。また、巻き上げられてゆく巻き物のように天が去ってゆき、すべての山と島がその場所から取り除かれた。そして、地の王たち、高位の者たち、軍司令官たち、富んだ者、強い者、すべての奴隷また自由人は、ほら穴や山の岩塊の間に身を隠した。そして山と岩塊とにこういつづける。「わたしたちの上に倒れかけ。そしてみ座に座っておられる方の顔から、また子羊の憤りからわたしたちを隠してくれ。彼らの憤りの大いなる日が来たからだ。だれが立ちえようか」。(啓示 6:12 - 17)

これが、「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る、ことに、彼を



突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。」(啓示 1:7) と言われている時です。

「キリストが臨在される」とは、何も見えない、そうと信じ込んだ信者だけが、認識できる事などではなく、全ての諸国民がその目で見て、恐れ、嘆く時になります。

それで、1914年の第一次世界大戦を「終わりの日」と勘違いしたばかりに、実際は全てこれから将来の出来事である、聖書預言の成就の、そのほとんどを、100年も昔の過去のことにしてしまったために、そして、今更引っ込みがつかないために、ありとあらゆる聖句を、書かれているとおりに受け止めることができないという、実に悲惨な状況になっていることが分かります。

「ひとつのウソは100のウソを産み出す」という格言は確かにものみの塔の場合真実そのままです。